

故郷第二場面 読んだ読んだ

この時突然、わたしの脳裏に不思議な画面が繰り広げられた。紺碧の空に金色の丸い月がかかっている。その下は海辺の砂地で、見渡す限り緑の西瓜が植わっている。そのあと、彼は父親にことづけて、貝殻を一包みと、美しい鳥の羽を何本か届けてくれた。わたしも一、二度何か贈り物をしたが、それきり顔を合わせる機会はなかった。

主人公は神秘の宝庫のような心を持つルントウに憧れを抱いていた。別れる際には泣いて悲しむほどに仲が良かった。しかし、その後は一、二度贈り物をしただけで、会う機会は作らなかった。それは互いに存在を忘れていったからであって、主人公には会う気がなかった。これは性格の問題であり、主人公は過ぎたことは割り切って忘れてしまう性格である。

くん

主人公は、ルントウに会うのを楽しみにしていて、会った後もすぐに仲良くなった。ルントウは神秘の宝庫のような心を持っていて、主人公はそんなルントウにあこがれていた。なぜなら、主人公は高い塀に囲まれたところに住んでいて、ルントウが見ていた景色を知らないからである。正月が過ぎて、二人が別れるとき、お互い泣いて嫌がっていたが、その後はルントウがくる用事もなく、主人公も会いたい気持ちも薄れていた。一、二度の贈り物のみで交流はなかった。

さん

今よりも暮らしが楽だったころにルントウと出会った主人公は、彼らの父親が主従関係であるにもかかわらず、ルントウから砂地の話を聞くなどの交流の中でルントウを慕うようになり、彼を自分の親分のように思っていた。また、それはルントウに対するあこがれでもあり、彼を「神秘の宝庫」とたたえるようになっていたが、時が来て二人はなくな

三年一組 氏名

引き離されてしまう。しかし、この頃から主人公には「今」につながるあきらめやすい性格があったのか、自分から再び会う機会を作ろうとせず、ルントウも不思議と（立場があったのかもしれないが）合おうとすることもなく、それっきり二人が顔を合わせることはなかった。

くん

主人公はルントウに出会い、とてもあこがれた。それはルントウが自然の中で様々な経験をしていて、高い塀に囲まれて生活している自分とは違い、神秘の宝庫をもっていたからだ。そんな違いがあったから二人は仲良くなり、別れも泣くぐらい辛かったのかもしれないが、その後の話を読むと、顔を合わす機会がなかった。それは来る必要がないのもあったかもしれないが、やはりそれほど主人公には会う気がなかったからだろう。

さん

主人公は、新年に会うルントウを楽しみにしていて、祭りの番を任されるほどのねールントウに信頼をもったりして、たった半日もせず仲良しになっていった。そんなルントウの心は、主人公にとって神秘の宝庫で、他の人とは違う特別な存在で憧れをもった。しかし、別れになると二人とも泣いていたが、その後は顔を合わせる機会を作ろうとはしなかった。

くん

主人公は、自分とは大違いで神秘の宝庫のような心を持つ雇い人のルントウと過ごした日々を思い出す。人見知りのルントウだが、主人公には平気で、半日もせず仲良くなり、鳥を捕るのが上手かったり、「チャー」のを知っていたりするルントウは主人公の憧れとなる。別れには二人とも涙を流すくらい寂しかったのだが、ルントウはあくまで「まんゆえ」であり、もう来る必要がなく、だんだん記憶の中から消えていき、その後、顔を合わすことはなかったのである。

さん